

主に仕える備え

2010.3.16.(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

マタイの福音書 7章19節から23節

「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」

マタイの福音書 25章14節から23節

「天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。五タラント預かった者は、すぐ行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」

ドイツのアイドリゲンの(古い建物なのですが)玄関に入ると、大きな文字で書かれています。「主に仕えるために救われた」と。「主に仕える」とは、いったいどういうことでしょうか。

パウロは喜びをもって、テサロニケにいる兄弟姉妹に書くことができました。

テサロニケ人への手紙・第一 1章9節、10節

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

テサロニケの兄弟姉妹は、「主に仕えるために救われた」「主を待ち望むために救われた」という確信を持っていましたから、周りの人々が聞く耳を持つようになり、導かれました。コリントの教会とは少し違った様子でした。コリントにいる兄弟姉妹は、パウロの悩みの種でした。彼はこのコリントにいる兄弟姉妹に対して、証しとして書いたのです。「私と私の同労者たちは主に仕える者です。私たちは神とともに働く者です」。私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。「神の恵みを無駄に受けないようにしてください」と。

今読んでくださった箇所を見ても分かります。イエス様に仕えると言いながら、目的を自らにおき、この世的な方法で主に仕える奉仕者がいるということは、重大な事実です。

聖書を読むと、「主の名によって病を癒し、悪霊を追い出した人々」に対し、イエス様は決して「良いしもべだ」、「よくやった」とおっしゃらず、「不法をなす者ども、わたしから離れていけ！」と語っておいでになっている記事があります。主にとって大切なことは、私たちがどれだけ多く何と何をするかということではなく、「どんな動機で、どんな力で、ご奉仕をするか」ということです。

ゼロという数を皆さんご存じでしょう。寒暖計を見ると、ゼロはプラスとマイナスを分けているのです。聖書の中で言うゼロは、「十字架」ではないでしょうか。十字架は、主に仕える者の奉仕が一時的であるか、永遠に続くかを決めます。主に仕えるしもべが十字架を自分のものとして体験していればいるほど、そのご奉仕は永遠に実を結ぶものとなるはずです。ですから奉仕者にとって大切なことは、「どれだけ十字架を体験しているか」ということ、また「十字架に対するその人の心の態度」とが問題なのです。

では、イエス様の「十字架の死」は、私たちにとって何を意味しているのでしょうか。「十字架」は、私たちの「罪」、私たちの「^{とが}赦し」、私たちの「当然受けなければならない刑罰」を身代わりになって受けてくださった裁きの赦しを意味しているのです。たとえば、ローマ書6章は、罪の力が打ち砕かれ、「私たちの古き人はイエス様とともに十字架につけられた」ことを教えています。この事実を見たとき、私たちもすべてを主に委ね、明け渡し、イエス様に仕えて行こうと決心したことがあったでしょう。しかし、そのように決心して主に仕えていくうちに、それらはすべて「自らの力ではできない」ということを体験

したでしょう。

次のローマ書7章を通して教えられることは、「自らの力で主に仕えることはできない」、「聖霊が私たちのうちに、また私たちを通してお働きにならなければ、そのご奉仕は全く意味のない、虚しいものだ」ということが分かるでしょう。しかしここまで全部を体験したとしても、主に仕える奉仕の準備が完全に成ったとは言えません。

必要な「たましいの戦い」について、考えたいと思います。たましいの中に戦いを感じなければならぬことです。イエス様でさえ、たましいの戦いをなされたのではないでしょう。イエス様はいつもみ父のみこころを成そうとされましたし、またそのように成されたのです。イエス様ご自身、意思をもっておられました。その上にご自身を立てられることなく、いつも「我が心ではなく、あなたのみこころを成さしめてください」との心を持って地上の生涯を全うされました。

イエス様は荒野で悪魔に試みられましたが、悪魔は、いわゆる殺人や姦淫などという罪にイエス様を誘いませんでした。ただ、「み父のみこころなしに勝手に何かをなさせよう」と、イエス様を試みたのです。イエス様の正直な証しは驚くべきものです。ヨハネ伝5章19節で、イエス様は次のようにおっしゃいました。

ヨハネの福音書 5章19節前半

「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分から何事も行なうことができません。」

「わたしは何もできません」と、イエス様ご自身おっしゃいましたが、これこそ、イエス様の実り多いご奉仕の秘訣だったのです。このことを頭で知り、行なうだけでは十分ではありません。イエス様が私たちの弱い点に一つ一つ御手を触れてくださり、「これはあなた自身から出たものであり、わたしから出たものではない。これは改めなければならない」と、教えてくださらなければなりません。私たちは、自らの真相を知ることが必要です。何が「肉的」であり、何が「霊的」であるかを見分けることが必要です。これを見分けるのは、「上からの光」による以外にないでしょう。

主によって用いられた仕え人の証しは次のようなものです。

・イザヤは、この上からの光に会ったときどのように叫んだかと言いますと、

イザヤ書 6章5節

そこで、私は言った。「ああ、私は、もうだめだ。...」

「私は災いです。私は滅びるであろう」と叫んだのです。

・エゼキエルについては、

エゼキエル書 1章28節

その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。

と書かれています。

・ダニエルについては

ダニエル書 10章8節

私は、ひとり残って、この大きな幻を見たが、私は、うちから力が抜け、顔の輝きもうせ、力を失った。

と記されています。

・ペテロについては

ルカの福音書 22章61節、62節

主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。」と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。

と。

・パウロがイエス様にお会いしたとき、彼は地に倒れた、と使徒行伝に書かれています。

・ヨハネはイエス様にお会いしたとき、その足元に倒れて死人のようになった、と黙示録に書いてあります。

もし主が私たちの心の目を開いてくださらなければ、私たちは自らがどんなに惨めな者であり、哀れな者であり、憎むべき者であるか知ることができません。「主のみことばは光」であって、すべてを明るみに出し、すべての主に逆らうものを焼き尽くしてくださいます。私たちは十字架の働きにより、主に全くより頼む者となりたいものです。イエス様は、ヨハネの福音書 5章30節

「わたしは、自分からは何事も行なうことができません。」

と。

ただそうなることによるのみ、主は私たちをまことの弟子と呼んでくださるでしょう。しかしそうなるまで、たましいの戦いが続きます。ペテロが一つの良い例ではないかと思えます。主イエス様はペテロに向かって、

マタイの福音書 16章17節

「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」

と御声をかけられましたが、それからあまり経たないうちに、イエス様は同じペテロに、「サタンよ。下がれ。わたしの邪魔をするものだ」と、激しいお叱りのことばをかけておられます。

悪魔はどのようにしてペテロの心を犯したのでしょうか。悪魔はどのようにして私たちにその力を振るうのでしょうか。私たちが、「自らによって自分を支配しているか」、「御霊によって支配していただいているか」によって、悪魔の力が及ぶか及ばないかが決まります。もし、私たちが自らを「たましいの支配」に委ねているなら、すべてのことが自らの興味のために、自らの利益のために、自らの満足のためになされていることになり、このようなものを土台にして動いていることになります。

このような歩みをする、私たちはペテロと全く同じように、十字架に行くイエス様をとどめて、イエス様からお叱りを受けるようなことをし続けなければならないでしょう。

もし御霊が私たちに支配しておられるなら、私たちのすべては、「イエス様の関心ごと」「イエス様の喜びたもうこと」だけを、思うようになるはずで、主の喜びたもうこと、「主が心に留めておられること」とは、「十字架」です。この「十字架」を通してのみ、主はご自分の目的を達成することがおできになります。十字架を離れ、世と妥協することは悪魔の誘いです。

ペテロは自分の興味、自分の思いを通そうとしました。ペテロは悪魔と結びつく者となっていました。これは何を教えるかと言いますと、ペテロは自らに頼り、イエス様に全くより頼んでいなかったことを教えています。ペテロは、「死ぬようなことがあっても、私はあなたを否みません」とイエス様に言いました。そう思ったのです。しかし、自らに頼るといことは悪魔に結びつくことを意味します。私たちも、死んでも良いからイエス様に仕えると決心して奉仕しますが、後に主の光に照らされるとき、それが自らの力でなされた奉仕であったことに気づきます。これこそ、「たましいの中の戦い」ではないでしょうか。

別の点について少し考えたいと思います。

「主に仕えるため」の理想的な学校とは、どのようなものでしょうか。自分のため、自分の興味のため、自分の意思から奉仕することを止め、すべてを主に委ねて、御霊の働きを体験的に学べるようなところでなければならないのではないのでしょうか。

このピリピ人への手紙 3 章を読むと、パウロは生まれながらの素晴らしい学力や能力を持っていましたが、「イエス様の学校」に入って、コリント人への第一の手紙 2 章のような、「まことの奉仕者」として、備えなければならないものを備える者に造り変えられました。コリント人への手紙・第一 2 章 2 節、3 節

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。

これから、四つのみことばを学んでみたいと思います。

これらを考察すると、私たちのたましいの働きが分かります。そして、自分勝手な生活から免れる方法は、ただ私たちが「日々自分の十字架を負って歩む」ことによる以外にない、とイエス様は教えておられます。「私たちの古き人は、イエス様とともに十字架につけられてしまった」ことを、ローマ書を通して知ることができます。このことを信仰によって自分のものとして受け取り、感謝しなければならないのです。しかし、今ここで問題にしていることは、私たちの古き人ではなく、「生まれながらの人」、「生まれながらの能力」を言っているのであり、私たちはこれらのことから解放されなければならないのです。

ヘブル人への手紙 10章39節

私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

ペテロの手紙・第一 1章9節

これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

ルカの福音書 21章19節

あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。

ここで語られていることは、私たちのたましいは古い人と同じように死ななければならないではなく、「救われなければならない」。即ち、「絶えず御霊のご支配のもとにならない」と言っているのです。

四つのみことばの

*はじめのみことばは、マタイ伝の10章34節です。

マタイの福音書 10章34節から39節

「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。」

このみことばは、「イエス様の御後に従う者は十字架の道を歩むのだ」と教えています。

自らの興味、自らの思い、自らの満足は、そこにもはや少しの場も占めていません。

39節

「自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。」

と書かれています。

このみことばの中に、「自分のいのち、つまり自分のたましいを失った者は、それを自分のものとします」と書いてありますが、いのちを失っている者とは、自らの願い、自らの思いを十字架によって切り捨てられている者、という意味です。もし、私たちがまことのいのちを失っている者であるなら、御霊は私たちを「十字架の道」に導き、連れて行ってくださいます。いわゆる平和、また妥協によって生まれた「お互いの間の一致」は、何の役にも立たないのです。私たちが主にふさわしい者であるかどうか、大切なのではないのでしょうか。

* 第二番目のみことばは、マルコ伝 8 章です。

マルコの福音書 8 章 32 節から 35 節

「しかも、はっきりとこの事がらを話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」

イエス様が、これから多くの苦しみを受け、十字架にかかるために出かけようとしたとき、ペテロはイエス様を自分の考えでいさめました。ペテロは、イエス様がいのちをお捨てになることを、(当然かもしれませんが) 欲しなかったのです。私たちは「自分のいのち」、「自分の意思」を主に明け渡そうとせず、ちょうどこのペテロに似ている者ではないのでしょうか。ペテロはイエス様に、どうか自分のいのちを大切にしてください、といさめました。しかしイエス様のお心は、自分の興味、自分の思い、自分の満足に傾いておられませんでした。イエス様はただ、「父のみこころ」だけを思っておられたのです。ですから、イエス様はおっしゃいました。

34節

それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでも私について来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

と。

私たちは、いったいどうでしょうか。主のみこころを愛しているのでしょうか。主のみこころを行なうだけでしょうか。主のみこころを行ないたいとしばしば考えますが、主の御旨^{みむね}を行なうために愛が伴いません。「イエス様の喜びたもうこと以外」の何ものも欲しない者になりたいものです。

ペテロはイエス様のためと思ったのですが、イエス様の御目から御覧になると、それは不純のものに見えたのです。なぜならペテロは主のことを半分、自分のことを半分思っていたからです。ですから、主イエス様はペテロがご自分を愛してそのように言ったこともお知りになりながらも、「サタンよ。下がれ」と厳しくお叱りになったのです。

* 第三番目のみことばは、ルカ伝 17 章です。

ルカの福音書 17 章 29 節から 35 節

「ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。人の子の現われる日にも、全くそのとおりです。その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。ロトの妻を思い出しなさい。自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝台で男がふたり寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。女がふたりいっしょに白をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」

「自分のいのち」とは、即ち「たましい」のことです。

ここでイエス様はご自身の再臨の時を語っておられますが、イエス様が再臨される時代はロトの時代のような、と言っておられます。ロトの家族は、罪深い街ソドムとゴモラが滅ぼされたとき、そこから助け出されました。再臨の時も同じである、とイエス様はおっしゃいました。ある者は残され、ある者は取り去られると書かれています。しかしここで、主は注意しなければならないみことばを述べておられます。

ルカの福音書 17 章 32 節

ロトの妻を思い出しなさい。

なぜイエス様はこのようにおっしゃられたのでしょうか。

ルカの福音書 17 章 33 節

自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。

と。

ロトの妻はもちろん信者であったにもかかわらず、この世のことを思い、後ろを振り返ったために塩の柱になりました。私たちは、イエス様に携え上げられるのを楽しみにしているのでしょうか。イエス様の喜びたもうことを、主のみこころ、イエス様のみ思いが、私たちの生活の中で第一の場所を占めているのでしょうか。ここに、ある者は残され、ある者は取り去られる、と書かれていますが、これはまことに真剣に考えなければならないみことばです。イエス様はこのために、私たちが「どのようにして備えをしていなければならないか」教えておいでになります。

マタイの福音書 24章42節

「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。」

と。

意識してイエス様に従わず、主のみこころに反して未信者と結婚し、地のことを思い、自らのために、自らの力でご奉仕している信者は、主のご再臨に備えができていると言えるかどうか問題です。私たちにとってイエス様がすべてであるなら、主のご再臨に備えができていると言えます。もし、地のことだけを思い、自分のことだけを思っているなら、ロトの妻と同じ運命に陥るでしょう。

「私たちの主からいただいた賜物」が、「主よりも高い位置」に置かれているようなことはないでしょうか。また、私たちの奉仕は主ご自身より高い位置を占めているのでしょうか。これは考えるべきことです。これは私たちが自らの力で生きているか、或いは御霊だけによって生きているかをはっきりさせる質問です。

私たちは、あらゆる人間関係、あらゆる事がらから、「十字架によって」解き放たれ、ただイエス様とイエス様に関することだけで、結ばれているのでしょうか。もしそうになっていなければ、主のご再臨は私たちにとって喜ばしいものではなく、恐ろしいものを感じるに違いありません。

パウロは、主にある兄弟姉妹のために戦い、救われた兄弟姉妹を愛して、次のように書いたのです。パウロの心を表わす箇所の一つではないかと思えます。

コリント人への手紙・第二 11章2節

私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

と。

結婚の前に花嫁が他の男を愛しているなら、花婿は決して快く思わないでしょう。私たちすべては十字架を担い、イエス様がお出でになるときに、ともに喜び合うことのできる者

となりたいものです。

* 第四番目のみことばは、ヨハネの福音書 12 章 24、25 節です。

ヨハネの福音書 12 章 24 節、25 節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」

「自分のいのち」即ち、たましいです。

ここで、「自分のいのちを愛する者はそれを失い」と書かれていますが、原語を見ると、この「いのち」は「たましい」を意味するのです。たましいは他のところを見ても分かりますが、自らの興味、自らの意思、自らの思いを意味します。

一粒の麦はイエス様のみ姿を現わしています。麦の粒はいのちを宿していますが、地に落ちて死ななければ、いのちが現われ、実を結ぶことができません。同じように、イエス様はご自分のいのちを持っておられましたが、もし死ななければ、麦の粒と同じようにそのままだったはずですが、イエス様は私たちの罪のためだけでなく、「多くの実を結ぶため」、「ご自分のいのちを分け与え、広めるため」に、死なれました。

パウロはこのために、イエス様の死のさまと等しくなり、たましいを死に渡し、自らのうちにイエス様のいのちが現われるように努めたのです。

コリント人への手紙・第二 4 章 11 節、12 節

私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです。

これこそ、「実り多い奉仕、まことの奉仕の秘訣」です

もちろん、新しく生まれ変わった者は永遠のいのちを持っています。どうしてこんにち、打ち負かされた、勝利のない、喜びのない兄弟姉妹が多いのでしょうか。なぜ内に宿しているいのちを外に現わしていくことができないのでしょうか。それは、私たちの内に宿しているイエス様のいのちを、自らのたましいの働きにより、自らの興味、思い、意思によって、あたかも麦の殻が麦の実を包んでいるように、押し包み、殺してしまっているからです。

イエス様の弟子を見てみると分かります。どのような人々であったかということです。

・ヤコブとヨハネは、主に従わない街を見て、天から火をもって焼き尽くすようにイエス様に願ったのです。間違った祈りでした。

- ・ペテロはかつて、死んでも自分はイエス様を拒まないと自らに頼り、豪語しました。
- ・ほかの弟子たちは、お互いに言い争い、誰が一番偉いかと論争しました。

しかし彼らは、十字架を知り、よみがえられたイエス様にお会いし、聖霊を受け、この聖霊によって全く違った者に変えられたのです。彼らは、「自己に死に」、「愛に満ちた」、「忍耐深く、謙遜で、恐れぬ」者となりました。彼らにとり、「知恵や名誉、自らの影響、成功、人気」などは、問題ではなかったのです。彼らは岩のように固い自我から解き放たれ、「御霊に導かれる生活」に入っていたのでした。確かに、「たましいの戦い」が必要です。それから「理想的な学校」に入ることも必要です。結局、「みことばに対して聞く耳を持つ」ことです。

最後に、「主に仕える奉仕の秘訣」とはいったい何でしょう。

なぜ兄弟姉妹の間にはこのように大きな開きがあるのでしょうか。ある兄弟姉妹は自分のことだけを考え、ある兄弟姉妹はイエス様に喜ばれるにはどうしたら良いのかと心を用いています。ある兄弟姉妹は何の喜びもなく、無理に聖書を読みます。ある兄弟姉妹は、みことばから喜びと力と導きを得るために、喜びを持ってみことばを読み、また、食べています。

自分のことばかりを考えていた弟子たちは後に、なぜあのように変わったのでしょうか。それは、「十字架を担って、自らをそこにつけた」からです。

マルコ伝 8章 3 4 節は、弟子の生活を変えた秘訣でした。

マルコの福音書 8章 3 4 節後半

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

自分の十字架を負わず、立場や名誉や人気を考えている者は、主のみこころにかなわず、イエス様はそのような者に、お前はわたしにふさわしくない、とおっしゃるのです。またこれらの人々に、イエス様は「わたしの弟子となることはできない」と言われるでしょう。思いのままの生活は日々十字架につけられ、「イエス様のいのち」が私たちの生活を通して現われていかなければなりません。

最後に三つの例を挙げて終わります。

*まず、

民数記 17章 1 節から 11 節

主はモーセに告げて仰せられた。「イエスラエル人に告げて、彼らから、杖を、父の家ごとに一本ずつ、彼らの父祖の家のすべての族長から十二本の杖を、取れ。その杖におのおのの名を書き記さなければならない。レビの杖にはアロンの名を書かなければならない。彼らの父祖の家のかしらにそれぞれ一本の杖とするから。あなたがそれ

らを、会見の天幕の中のわたしがそこであなたがたに会うあかしの箱の前に置け。わたしが選ぶ人の杖は芽を出す。こうしてイスラエル人があなたがたに向かってつばやく不平をわたし自身が静めよう。」モーセがイスラエル人にこのように告げたので、彼らの族長たちはみな、父祖の家ごとに、族長ひとり一本ずつの杖、十二本を彼に渡した。アロンの杖も彼らの杖の中にあつた。モーセはそれらの杖を、あかしの天幕の中の主の前に置いた。その翌日、モーセはあかしの天幕にはいって行った。すると見よ、レビの家のためのアロンの杖が目をふき、つぼみを出し、花をつけ、アーモンドの実を結んでいた。モーセがその杖をみな、主の前から、すべてのイスラエル人のところに持って来たので、彼らは見分けて、おのおの自分の杖を取った。主はモーセに言われた。「アロンの杖をあかしの箱の前に戻して、逆らう者どもへの戒めのため、しるしとせよ。彼らのわたしに対する不平を全くなくして、彼らが死ぬことのないように。」モーセはそうした。主が命じられたとおりにした。

アロンはまことに主によって召し出されましたが、アロンのなす奉仕はまことの奉仕であるかどうか疑われていました。主は誰が召しにかなうまことの奉仕者であるかを示すため、十二本の杖を取り、各氏族に配られました。するとアロンの杖から芽が出、つぼみを出し、花が咲き、実が実り、アロンこそまことの召し出されたしもべであることが明らかになったのです。一晩中、杖は真っ暗な所で、人目につかない所にありましたが、翌日見るとみごとに芽が出、実が実っていました。「真っ暗な死の経験を通して初めて、主に認められるまことの奉仕者」になることができたのです。「よみがえりは死を通して来」、「いのちは死ぬことによってもたらされ」、「実は暗き中を通して初めて実を結び」ます。

*二番目は、たびたび見てきました、ペテロという男です。

はじめペテロは自らにより頼み、「私は死ぬようなことがあっても、あなたを拒みません」と言いました。ペテロはまた、自らの力を振るって兵隊の耳を切り落としました。しかし主はこのようなしもべをお用いになることはできません。ペテロは暗いところを通らされなければなりません。自分が否んだイエス様は、十字架につけられ、死んでしまわれました。それからの三日間、ペテロは「深い絶望と暗闇の中」に落とし込まれました。この忘れることのできない三日間の体験が、後のペテロの奉仕に重大な影響を与えたに違いありません。

*最後に、ヤコブの例を見ましょう。

イサクの子であるヤコブは、主に仕えようと願ったのですが、未だ自分の好みを持っていました。ヤコブは主のみこころをなそうとしましたが、未だ自らの力を用いていました。この自らの力は砕かれなければなりません。この状態にヤコブは満足を感じていませんでした。心から叫ぶようになったのです。「私を祝福してくださらなければここを去らせませ

ん」と。実に激しい戦いであり、これによって彼は自らの力で歩むことができない身とされました。そのとき以来、「欺く者」という意味のヤコブの名は変えられ、「神が戦う」という意味の「イスラエル」という名に変えられました。戦いの後、ヤコブは歩きましたが、腰の骨が外れ、変わったさまになっていました。即ち「自らの力が砕かれた」のです。

私たちも、そのところまで進んでいかなければなりません。そのときには、自らに頼る、いっさいのものがなくなります。そうやってはじめて、私たちは何をなすにも主により頼んでするようになるでしょう。証しするにも人を導こうとするにも、「自らの力により頼まず」、イエス様が私たちを通してお働きになる奉仕だけが、平安の実を結ぶことを知ることになります。

私たちは、「自らに頼ることがいかに恐ろしいことであるか」を知っているのでしょうか。私たちの思い、主のみ思い、私たちの興味、イエス様のご目的、これらの心の戦いは生涯私たちに付きまとうでしょう。私たちは生まれながら、自分のことばかりに心を配る性質を持っているので、イエス様は私たちが「自分の力がどんなに虚しいかを悟るために」、訓練の場へと私たちを導いてくださるのです。

パウロは言いました。

ピリピ人への手紙 3章3節

神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たち...

ローマ人への手紙 15章17節から19節前半

それで、神に仕えることに関して、私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです。私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行ないにより、また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。

このように言うことができるなら、本当に幸いです。この霊的な奉仕の備えを、主からいただく主のしもべとなることができたなら、本当に幸いです。

了